



独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの 医療センター

アートプロジェクト Topics

—今月のショット—

小児棟外壁のハートの原画を描く患者さん
(旧香川小児病院重心病棟)

患者さんが使用している器具は、
割り箸の先にクリップが付いてい
て、好きな色のクレヨンが挟めるよ
うになっています。手で握る部分に
は柔らかな布が巻いてあり、少し
の力でも色が塗れる工夫がしてあ
ります。当院の療育指導部の方が
発明してくれました。



2013年 12月号

—院内の小さな声から—

夜の病院、暗い廊下を一人の若い男性が歩いていました。右手には洗濯物と紙おむつが入った大きな紙袋。左手には食べ物がどっさり入ったスーパーのビニール袋。きつと入院している子どもと、付き添っている奥さんのところに必要なものを届けにきたのでしょう。職場からの帰りなのか、土のついたつなぎの仕事着を着ていました。男性は廊下にある扉の付いたニッチの前でふと、足を止めました。そしてニッチの扉を開き、そこに入っていたプレゼントを手にとると、書いてあるメッセージを読みました。それから、遠くで見ている私に気づく風もなく「クスッ」と笑うと、プレゼントを紙袋の上にちょこんと乗せて明るい病棟のドアの向こうに消えてゆきました。そこにどんなメッセージが書かれていたのか、どんなプレゼントが入っていたのか、わかりません。ただ、誰かが誰かの幸せを願って作ったギフトが、あの若いお父さんの手を通じて大切な人へと届けられようとしている、その瞬間に立ち会えて、私はとても幸福な気持ちになりました。



外壁

小児病棟の外壁に描かれている色とりどりの木には、白いハートの実がたくさん実っています。縦に長いもの。横に伸びたもの。りんごみたいなの。三つがくっついているもの。あの様々なハートの形は旧香川小児病院に関係する子ども達が描いてくれたものです。同じハートでも、一つとして同じ形のものはありません。子ども達ひとり一人に寄り添った医療がお届けできるように。という当院の「理念」を形にしました。

そのハート集めのお手伝いをしてくださったのが療育指導部の保育士さんです。保育士さん達は、日々様々な病状の子ども達の体調や、心の動きに寄り添いながら、療育プログラムを組み立て、療養中の子ども達の成長の手助けをする専門家です。新病院のアートプロジェクトでは、子ども達に楽しみながらハートを描いてもらうため、素敵な器具を発明してくれました。(写真上)そして、カートに500色のクレヨンに乗せて「〇〇ちゃんのハートが外壁に描かれるかもしれないよー。さあ、どんな形にする？一緒に病院を創るんだよー。」と、リズムカルに声をかけながら病棟を回っていただきました。あの時発明された器具は、それまで誰も見た事のない形をしていました。「子ども達の描いたハートで病院を包みたい。」という「想い」が、あの不思議で優しい形をした器具を生み出したのです。病室に流れたカラフルな時間は、今は目に見えないけれど、外壁に描かれた木々になって、今もあたたかく子ども達の未来を照らし続けているのです。

今月の一枚

作家:井上 よう子

人の存在の切なさ、はかなさ、温かさを、人そのものは描かずに「喪失と再生の色」ブルーの透明な空気の中に感じとってもらえたらと、大切な人を想う気持ちを込めて描き続けています。